

親鸞における時機の問題

—「化身土巻」所引『安樂集』を中心として—

平原 晃 宗

『安樂集』の著者である道綽は、浄土の祖師の中でも、殊に時機の自覚において願生を勧め、聖浄二門の教判を行ったことで知られており、『教行信証』「化身土巻」で明証される親鸞の時機勸決の思想に影響を与えていると考えられる。「化身土巻」の後半で『安樂集』は四文引用されており、この四文を考察することにより親鸞における時機の問題が明確になると思われる。中でも二番目に引用される第一大門一の教興所由章の文（『定親全』一・三二—三頁）を中心としていくことにしたい。

教興所由章の文では、まず教が興る理由を明らかにし、時と機の両面から浄土に帰入するように勧めることが有ることを押さえている。そして次に、『正法念経』『大集月蔵経』が引用される。特に『大集月蔵経』の文では、五五百年説として釈尊滅後を五つの時代に区分して了解しており、この引用に続く道綽の自釈では、今は仏滅後一五〇〇年を経過した、第四の五百年であることを指摘している。これを親鸞が三番目に引用している、

釈迦牟尼仏一代、正法五百年、像法一千年、末法一万年には衆生減じ尽き、諸経ごとく減せん。

（『定親全』一・三三—三頁）

という三時史観に当てはめるならば、第五の五百年という法滅の危機が目前に迫り、まさに「末法」であることの自覚がここで表

れていると考えられる。しかしそれは、単に五五百年説が仏滅後の時を経るにしたがって行証が廢れていくことを示すものではなく、行証なき末法を如何に認識していくかということを示すものではないと考えるべきである。つまりここで五五百年説の示すことは、釈尊の入滅を基点として開かれた仏教の衰退を通して、当今が末法であることを示すと同時に、何らかの問題提起をしているのである。何故ならば、もし五五百年説において仏教衰退と当今が末法であることを示すだけのものであるならば、当今の現象を指摘した悲観的な史観に止まってしまうだろう。

そこで、『正像末和讃』に、
像末五濁の世となりて 釈迦の遺教かくれしむ
弥陀の悲願はひろまりて 念仏往生さかりなり

（『定親全』二・一六七頁）

と詠われていることに注意しなければならない。この偈文で釈尊の遺教が隠れることの示唆するものは、釈尊を宗教的人格者とし、釈尊の経言にのみ執着している釈迦教への終焉が告げられていると考えられる。釈迦教の終焉に対し弥陀の悲願が広まり、さらに念仏往生が盛んになることを示すことは釈迦教の終焉に積極的な意義を親鸞は掲げているのである。このように了解するならば、五五百年説は単に危機意識を掲げるものや、現象としての仏教衰退を意味するものではない。釈尊の遺教である諸経を、釈尊に対する執着の上に依り所としていたことが、末法という事実を突きつけられたことにより、始めて弥陀の本願が時機を簡はずして悲引することが浮き彫りになるのである。五五百年説とは仏教衰退ということを示すことにおいて、どこまでも釈尊の経言に執着する人間の本性を浮き彫りにし、弥陀の本願の斉しく悲引したまう

用きを顕示するのである。

次に教興所由章の文で注意できることは、第四の五百年を了解する上で「修福懺悔」と教示されている点である。第一、第二、第三の五百年が全て過ぎ去り、搭寺を造立し福を修することによって行証を可能にしようとする自身に懺悔することが、ここでは述べられていると考えられる。このような五百年説という時の認識は、行証不能な状況を自己の現実の姿として受け取れることを意味し、どこまでも行証に執着し続ける衆生の現実相を懺悔しているのである。行証不能ということが時の問題に触れず語られるならば、自己の関心の趣くままに教に対して何らかの作為を施すこととなり、そこで顛倒した修道実践ということが成立するであろう。そのように、行証可能と錯覚しながら修道を行う衆生の執着に目覚めさせるものが末法といわれる「時」の問題なのである。そして、この「修福懺悔」ということを、「仏の名号を称す時の者なり」と押さえ、さらに一念の称名が八十億劫生死の罪を除き往生するとあり、「常念に修する」ことは「恒に懺悔する人」であると説かれている。ここで注意しなければならぬのは、「常念」の「常」と「恒に懺悔する人」の「恒」の違いである。「一念多念文意」ではこの違いを、

「恒」は、つねにという、「願」は、ねがうというなり。いま、つねにというは、たえぬころなり。おりにしたごうで、ときどきもねがえというなり。いま、つねにというは、常の義にはあらず。常というは、つねなること、ひまなかれというころなり。ときとして、たえず、ところとして、へだたず、きらわぬを、常というなり。〔定親全〕三・一二五頁〕と教示されている。「恒」は一瞬の絶え間無く持続することでは

なく、その時の縁に触れて思い起こすことを意味しており、信ありて推求という信自体の内面を確かめる念仏行者の具体相、すなわち機に対する言葉であると考えられる。「常」とは、一瞬の絶え間無く、念仏行者に用き続ける如来大悲の用きを示す言葉と了解できる。「常念を修する」ということは、単に称名の相統ということではなく「常に」如来の大悲が用き続けるという、本願を自証し行証していく名を称す行者を示していると考えられる。よって「常念を修する」ことが「恒に懺悔する人」とあるのは、方便誘引する如来本願の用きによって、我執し続ける我が身の実相を照明されることに対する懺悔を示しているのである。称名と懺悔が、本来異なる概念をもつものであることは言うまでもないが、この文からは、称名することの中には懺悔ということを含むしていると考えることができる。それは親鸞が『尊号真像銘文』で、

南無阿弥陀仏とならざるはずなわち無始よりこのかたの罪業を懺悔するにたるともすなり。〔定親全〕三・九二頁〕

と述べられていることと同一のものであろう。本願を自証し行証する称名念仏は、我執し続けるという自覚を通して、そこに無上の信心を開示する如来の不行にはかならない。如来の大悲を行ずる真の仏弟子において、願力自然の力用による念仏こそ懺悔の道なのである。そこに懺悔、称名念仏ということは自力の上に成立するのではなく、他力、選択本願によって成立することが明されるのである。ここに時の自覚において勸帰浄土する道理が「選択本願」として押さえられていることが読み取れるのである。

このように親鸞は、無仏の世に生きる衆生が釈尊の教法に執着することを、時機の問題を問うことによって明らかにし、弥陀の本願が斉しく悲引したまう用きを顕示するのである。